

秩父事件を追って

播 本 秀 史

はじめに

5年前ころ、秩父をバイクで走っていた時、秩父事件の資料館関係の小さな看板が目に入った。車で何度か走った所だが、その時まで気づかなかった。看板を頼りに石間川に沿ってずっと遡った。「石間交流学習館」は廃校になった小学校の中にあった。そこから少し遡れば山の中腹に家々が見える。沢戸という集落だ。秩父の典型ともいえる集落である。このような集落を秩父では「耕地」と呼ぶことを後で知った。この資料館を出発点とし、私の秩父事件の事跡巡りが始まった。こんな時バイクは実に便利だ。Uターンの難しいタイトな道も少なからずあるし、駐車場にも苦労しない。

参考文献も同時に読みはじめた。ふと気づいた。以前、田中正造と足尾鉍毒事件に興味をもって集中的に調べたことがあった。今回の秩父事件は足尾鉍毒事件と共鳴するものを感じた。秩父事件は「自由民権運動の最後にして最高の形態」（井上幸治）と言われているが、足尾鉍毒事件も自由民権運動の一貫と考えるとよいのではなかろうか。その意味で秩父事件は「最後」とは呼べないかもしれない。しかし、「旦那自由党」の自由民権運動ではなく、民衆を中心とした「最高の形態」であったことは間違いない。

人物でみても両事件は呼応する。田中正造は義人として位置づけられる評もある。歴史評価の妙であろう。正造義人説は木下尚江に負うところ大である。

秩父事件を追って

義人といえば佐倉の惣五郎を思い出すが、たとえば秩父事件の会計長だった井上伝蔵なども義人と呼べないだろうか。

正造と伝蔵とに共通する人間性を感じる。それは社会（国家）構造の矛盾を見抜く力と人間（弱い者）を大切に思う心（マイノリティへの愛）と人間としての責任感である。

また、「教育臨床・実験」というゼミで2014年度は「秩父事件」をテーマとした。その成果は「2014年度教育臨床・実験報告書」として冊子ならびにCDに収めた。

本拙論ではこれまでゼミで調査・研究してきた成果の紹介と私自身のもつこれからの課題を述べる。

1. 「2014年度教育臨床・実験報告書」の紹介

ゼミ生が6名（1名は秋学期より留学）だったこともあり、この年は全員がひとつの班として「秩父事件」をテーマとした。動機づけの一つとして、神山征二郎監督の映画『草の乱』のDVDを見せた。井上伝蔵を軸としてよく秩父事件が描かれている。映画のために復元された井上伝蔵邸は、「秩父事件資料館」として道の駅「龍勢会館」にある。また撮影で使われた民家の一部も同じ道の駅に残されていて、その内の一軒はイタリアン料理店があった。なかなかおいしい店だった。そこのマスターから地域の人たちがエキストラで協力した様子も伺った。たとえば、民衆が河原を進軍していくシーンのためにエキストラの人たちは2時間も河原で待たされたが、俳優の人は後から来てすぐ撮影に入りすぐ帰ったなど。しかし、その店は東日本大震災以後しばらくして耐震性不足で取り壊されることになった。学生と見学に行った時はすでにその民家はなかった。学生とは1年間のゼミ時にのべ3回秩父めぐりをした。そのうち1回は1泊のゼミ合宿をした。しかし、その時は全員ではなく、同行したのは学

生2名と私の3名だった。

「報告書」の紹介をする。

目次

1. 秩父事件のアウトライン 岩崎琢也
2. 秩父事件の意義——女たちの秩父事件—— 横山大地
3. 秩父事件と田代栄助 長尾将之
4. 秩父事件で獄死した人数と獄中の実態 中澤智弥
5. 獄死者リスト——国のあり方を問う—— 御園太一
6. 終わりに 播本秀史
7. 写真集 横山大地 中澤智弥

獄死者リスト

この中からまず獄死者に注目した中澤君と御園君のレポートを紹介したい。

中澤君の調査では「獄中で亡くなった人の人数は、27名に及ぶとされている。そのうち、わかっているのは23名である」とある。彼がリストアップした23名を紹介する。

なお、御園君とも共同で調査したはずだが、微妙な差異があった。

中澤智弥君の調査

1. 柴岡熊吉（大宮）
2. 高岸団作（石間）
3. 門松庄右衛門（金屋）
4. 村竹茂市（上日野沢）
5. 大野長四郎（風布）

御園太一君の調査

1. 柴岡熊吉
2. 高岸団作
3. 門松庄右衛門
4. 村竹茂市
5. 大野長四郎

秩父事件を追って

- | | |
|------------------|----------------------|
| 6. 森川作蔵 (上日野沢) | 6. 森川作蔵 |
| 7. 新井紋蔵 (下日野沢) | 7. 新井紋蔵 |
| 8. 柿崎義藤 (石間) | 8. 柿崎義藤 |
| 9. 小森茂作 (不明) | 9. なし→御園君が正しい |
| 10. 萩原勘次郎 (三沢) | 10. 萩原勘次郎 |
| 11. 高野作太郎 (下吉田) | 11. 高野作太郎 |
| 12. 彦久保次郎吉 (阿熊) | 12. 彦久保次郎吉 (ただし落合説) |
| 13. 新井駒吉 (阿熊) | 13. 新井駒吉 |
| 14. 新井蒔蔵 (下日野沢) | 14. 新井蒔蔵 |
| 15. 嶋田清三郎 (本野上) | 15. 嶋田清三郎 |
| 16. 反町嘉平 (三沢) | 16. 反町嘉平 |
| 17. 新井卯吉 (石間) | 17. なし→中澤君が正しい (落合説) |
| 18. 高岸駅蔵 (石間) | 18. 高岸駅蔵 |
| 19. 島田幸右衛門 (本野上) | 19. 島田幸右衛門 |
| 20. 新井繁太郎 (石間) | 20. 新井繁太郎 |
| 21. 堀口幸助 (群馬・渋川) | 21. 堀口幸助 |
| 22. 木島善一郎 (寄居桜沢) | 22. 木島善一郎 |
| 23. 村上泰治 (下日野沢) | 23. 村上泰治 (ただし秩父事件前) |
| | 24. 新井甚作 |
| | 25. 浅見嘉七 |
| | 26. 菅沼鍋吉 |

これが中澤・御園君の獄死者リストである。

中澤君は村上泰治を加えて23名、御園君も村上を加えて24名をリストアップしている。その内、中澤君指摘の小森茂作は獄死していないので、22名となる。新井卯市を中澤君は人数に入れたが、御園君は入っていない。これは落合

秩父事件を追って

寅市の「秩父殉難志士慰安建碑趣意書」の「孤憤獄死者」に新井卯市の名があるが、史実として確証されてはいない。彦久保次郎吉も同じ事情である。

参考までに私が調べた獄死者を記す。

秩父事件獄死者名簿

1. 新井紋蔵 下日野沢村小隊長 沢辺耕地 自由党員 31歳 軽懲役6年
2. 新井蒔蔵 下日野沢村小松耕地 妹チヨ 自由党員 21歳 禁固2年
3. 村竹茂市 上日野沢村 阿熊村上日野沢村用小隊長→小荷駄方 45歳 軽懲役7年
4. 大野長四郎 風布村 48歳 徒刑15年 樺戸集治監「理非をわきまえる」人
5. 高野作太郎 赤柴 徒刑12年 釧路集治監 33歳 作太郎地蔵
6. 新井駒吉 阿熊村 鉄砲隊長 49歳 軽懲役6年
7. 柴岡熊吉 大宮郷小隊長会計 46歳 軽懲役8年
8. 萩原勘次郎 三沢村小隊長 23歳 軽懲役8年
9. 新井繁太郎 石間村 兵糧方 46歳 重禁固4年
10. 門松庄右衛門 三品村 弾薬方 53歳 軽懲役8年
11. 嶋田清三郎 本野上村 伝令使 37歳 重禁固3年6月
12. 高岸駅蔵 石間村 伝令使 44歳 軽懲役6年6月
13. 高岸団作 石間村 柱野警部補殺し 4?歳 死刑
14. 柿崎義藤 石間村 乙隊抜刀隊組長 46歳 無期徒刑 樺戸集治監
15. 木島善一郎 寄居桜沢村 煙火（はなび）師
16. 浅見嘉七 芦ヶ久保村 32歳 重禁固2年6月
17. 反町嘉平 三沢村 38歳 重禁固5年 自由党員
18. 森川作蔵 上日野沢村小前 3?歳 有期徒刑15年 北海道
19. 彦久保次郎吉 阿熊村 2?歳 獄死?（落合寅市の説）

秩父事件を追って

20. 新井卯市 石間村沢口 罰金2円 獄死? (落合説による)
21. 菅沼鍋吉 贄川村 27歳 軽懲役6年6月
22. 新井甚作 飯田村 17歳 重懲役11年
23. 堀口幸助 洪川村 29歳 重懲役9年
24. 島田幸右衛門 本野上村 48歳 重禁固 3年6月
25. 大野茂吉 横瀬村 罰金10円 余罪取調べ中 獄死
26. 村上泰治 下日野沢村 21歳 「党内随一の麒麟児」妻はん
27. 南関蔵 (自由党員)

いずれにしろ、より緻密な調査が求められる段階である。獄死者を調べてみてはと促したが、その意味を両君は理解してくれ熱心に調査に当たってくれた。特筆すべきは御園君の調査であった。彼は重禁固1年以上の者を井上幸治・色川大吉・山田昭次編集『秩父事件史料集成』(二玄社)の第1巻農民裁判文書(1)から第3巻同(3)までに当たってリストアップした。B5版の本でちなみに3巻とも1,000頁を超す大部である。実際のところ、こういうリストアップはすでに先行研究がある。たとえば、戸井昌造の『秩父事件を歩く』3部作に「人名一覧表」など。しかし、こういう地道な作業で研究する姿勢を学んでくれたかと思う。

御園君は言う。「以上が実刑判決を受けた者達のリストである。細かく見てみると、4,175名中143名が処罰の判決。さらに143名の受刑者のうち24名が獄死である」と。

143名は重複者があったので実際は130名となるが、いずれにしても獄死者の割合はすさまじいものがある。

さらに御園君は獄死者の簡単な人物紹介も述べている。これは御園君が参考文献として記しているように、戸井昌造著の『秩父事件を歩く』三部作と筒井作蔵著『おそれながら天長様に敵対するから加勢しろ!』からの引用である。

秩父事件を追って

この参考文献は御園君にはだいぶ後になって紹介した。基本文献から自らでリストアップしてほしかったからだ。ともかく、そのような作業の後、彼は次のような感想を記している。

「今回の研究をしてみると矛盾を感じる。国が繁栄するためになぜ国民が国によって殺されなければいけないのだろうか。国というものは国民がいてこそ成り立つものである。その国民の声すら聞き入れず力で黙らせてしまったということは国として成り立っていない（中略）この矛盾というのはしばしば現代にも感じることもある」

こういう社会認識は嬉しいものだった。社会の矛盾を見抜く力である。教員となる人にこういう認識は必要だし、教員とならなくても、社会人として大切な認識だと考える。

なお、参考までに中澤君が調べた旧刑法における刑罰の種類も紹介する。これは中澤君が吉田教育委員会発行『田中千弥日記』の「秩父暴動雑録」から引用したものである。ここでは中澤君に従いつつ埼玉新聞社出版局『田中千弥日記』「秩父暴動雑録」も援用して紹介する。

1. 死刑

規則に定むる所の官吏臨検し獄内に於て之を行行。死刑は司法卿の命令に非ればこれを行行ことを得ず。

2. 無期徒刑

徒刑は無期有期を分たず島地に發遣し定役に服す。

3. 有期徒刑

12年以上15年以下

秩父事件を追って

4. 無期流刑

流刑は有期無期を分たず島地の獄に幽閉し定役に服せず。無期流刑は5年を経過すれば行政の所分をもって幽閉を免じ島地において地を限り居住せしむることを得、有期流刑の囚2年を経過する者亦同じ。

5. 有期流刑

12年以上15年以下

6. 重懲役

9年以上11年以下 内地の懲役場に入れ定役に服す。

7. 軽懲役

6年以上8年以下

8. 重禁獄

9年以上11年以下 内地の獄に入れ定役に服せず。

9. 軽禁獄

6年以上8年以下 重禁錮は定役に服し軽禁錮は定役に服せず

(欄外) 「軽罪の主刑」1. 重禁錮は11日以上5年以下 2. 軽禁錮 同上 3. 罰金 2円以上

(欄外) 「違警罪の主刑」1. 拘留 1日以上10日以下 2. 科料 5銭以上1円95銭以下

私は現在、浦和在住24年になるが、地元にあった浦和監獄でなんと12名の秩父事件および自由民権運動関係が獄死している。

戸井昌造によれば、柴岡熊吉、浅見嘉七、村竹茂市、萩原勘次郎、新井甚作、門松庄右衛門、菅沼鍋吉、新井紋蔵、新井宇市および自由党员村上泰治、南関蔵である(浦和更生園墓石、さいたま拘置支所の管轄)。

女たちの秩父事件

これは横山大地君の着目した視点である。マイノリティへの視点である。彼は研究の動機を次のように述べる。

「秩父事件調査にあたって、中心には男性が描かれているが、女性はその時どうしていたのかという疑問が浮かんだ」と。

彼はまず、裁判調書に名前がある、小柏ダイと新井チヨ、および黒沢ウラに着目する。ウラは解放されたが、ダイとチヨについて横山君は「彼女らの裁判言い渡し書には、武器となるものを調達したことや、勧誘や誘導があったと認められ、当時の刑法 137 条の 2 円以上 20 円以下の罰金によって 2 円の罰金に処する処分を受けた」と述べる。

たしかに小柏ダイには 2 円の罰金が科せられたが、新井チヨについてはペンディングとしたい。「農民裁判文書」ではチヨの判決は確認できなかった。戸井昌造は「1.5 円」と記している。『秩父事件を歩く』なお、新井チヨは蒔蔵の妹。この二人の母、ゲンも 5 円の罰金を科せられている。

横山君も引用しているがチヨの尋問調書にある発言は興味深い。困民党は凶器をもって打ち壊しや火をつけているが、それをどう思うか、という問いかけに「日歩貸しを毀したという話は聞いたけれども、借りた金を返さなくても良いというから悪いこととは思わない」と答えている。19 歳である。

高利貸は体制側に属する。その暴走を黙認し、困民を一方的に断罪する体制・権力側の矛盾を素朴な言葉だが、きっぱりと指摘しているのではなかろうか。

横山君の指摘で「裁判記録をみて（中略）困民党の動きやその働きはほとんど見抜かれていて（中略）警察の捜査はかなり進展していた」というのがあるが、たしかにかなり周到に捜査されている様は何えた。また、一方で調書は作

文という要素も留意したい。

また、次のような指摘もあった。「秩父事件が終わったあとも、残された人たちは戦い続けているのではないか」

横山君は教職には就けなかったが、こういう社会認識、人間理解は社会人として意味あるものとなるのではなからうか。ちなみに彼は放送局で働いているはずである。

彼の思いに連なる著作はすでにある。『女たちの秩父事件』『秩父事件の女たち』『秩父事件の妻たち』等である。ここでは記さないが残された妻や女たちのそれからの生活は並大抵のものではない。文字通り辛酸を舐めながら生きあるいは死んでいった。

人物研究—— 田代栄助 ——

長尾将之君は田代栄助について調べた。構成は1. 秩父事件とは 2. 栄助の生い立ち 3. 総理招聘 4. 栄助合意 5. 農民軍の戦跡 6. 辞世の句 7. 田代栄助という人物 というものである。

長尾君は栄助を次のように評する。国家的レベルでの政治的・社会的な主義主張を自らの信条とはしていない。自由民権運動にも参加していなかった、と。後者から言うと、栄助は自由党の村上泰治を訪問している。その時の村上の対応によって自由党入党が頓挫し、自由民権運動から身を遠ざけた。よって必ずしも、天下・国家を思う意識ないし志向がなかったわけではないかもしれない。また、蜂起を秩父だけでなく関東一円の一斉蜂起を構想していた点などを見ると、具体的な政治的手腕は確かに不足している面もあるが、将としての器であり、政治的見識もあるのではないか。ただ、小鹿野から大宮郷（秩父市内）に進出した時、本陣を秩父神社に置こうとしたところなどは、近代的な政治的センスには乏しいと言わざるをえない。ここは、長野北相木村から来た、菊池

秩父事件を追って

貫平や井出為吉が優れている。貫平の進言で郡役所を本陣とした。後世の歴史家はこれによって、3日間だが「コムニオン」無政の郷が成立したと唱える人もいる。秩父事件の重層的なところである。自由党、困民党、そして貫平・為吉に代表される層である。田代を総理に選んだ層は困民党を中心とした層であろう。ただ、困民党の中に自由党員はいたので、その層は明確に分かれるものではない。

長尾君は「これほどまで世のため人のために尽くすことのできる人がいるであろうか。栄助のことを調べていくうちに栄助のこの男らしさにみるみる惹かれていった」と述べている。「男らしい」ということばを使ったのは長尾君らしいが、「人間味」でもいいかもしれない。秩父事件にはこういう「世のため人のため」に尽くした群像がある。井上伝蔵しかり、加藤織平しかり、異彩を放つ新井周三郎もまたしかりである。その他にも自分は困窮しているわけではないが、「世のため人のため」自らを犠牲にした一連の人たちがいるのだ。

誤解を恐れず述べれば Do for Others 「他者への貢献」とさえ言いうるものが、そこにはあるのではなからうか。

秩父の音楽寺を訪ねた時、そこに秩父事件関係の碑があった。音楽寺はそこから大挙して大宮郷に進軍したゆかりの地であるから当然のことではある。ただ、その碑の文言にはどこか違和感があった。「われらは秩父困民党暴徒と呼ばれ 暴動と呼ばれることを拒否しない」とある。これは抑圧されてきた子孫感情を逆撫でする可能性があり、体制側の「暴徒史観」に利用される可能性もある。暴徒・暴動ではない、世直しの、正義の戦いであるという「秩父事件」の復権に水をさすものともなりかねない。しかしまた、暴徒・暴動と呼ばれることを承知しながらも「世のため人のため」貢献した人を顕彰するものとすれば納得できないこともない。建立された1978年ならば秩父事件の歴史的評価も変わりつつあった頃だから、敢えて「暴徒・暴動」という語を使ったとも考えら

れる。しかし、「秩父困民党無名戦士の墓」という表現は誤解を生む。「碑」でよいのではないか。

「世のため人のため」の精神は権力側に立つ鎌田冲太の「秩父暴動実記」にも見られる。その意味で長尾君の見解は正しい。鎌田は薩摩出身で事件当時、埼玉県警の国事係警部で後に秩父郡長になった人である。「実記」に自由困民党の盟約5条が記されている。

1. 我々は日本国に在り压制官吏を断ち真正の人を立つるに務むる事
2. 我々は前条の目的を達する為め恩愛の親子兄弟妻を断ち生命財産を捨る事とある。以下は省くがこの2条だけでも只事ではない。崇高な精神ではなかろうか。「友のため己の命を捨てること、これより大いなる愛はない」とのヨハネ伝にも通じるものがある。

この鎌田の文言は副総理の加藤織平が調書で話した内容とも呼応する。調書では次のようにある。「実記」も「調書」も原文はカタカナ書きで文語体だがここでは現代文で紹介する。

「自分どもはこれまでこの辺りの博徒であったが、これからは善人となって万民の苦しみをいくらかでも助けたいと決心しました。ですから家族や財産はもちろんこの命も棄てることはなんでもありません」

ここで留意したいのは「博徒」と書かれていることだ。ここに「作文」を感じる。少なくとも織平が言ったとされる「博徒」と官憲のそれとは意味・内容が異なる。たしかに困民党の中には前科持ちでやくざ・博徒のような人もいた。しかし、ほとんど全てといってよい人は前科もなく、普通の農民である。また、村役や教員、宮司等のいわゆるインテリ層もいた。博徒・博打というと聞こえが悪いし、やくざ渡世の類を連想させるが、村落の一種の娯楽的要素が強いものではなかったか。むろん、賭け事で借金する人もいただろうし、身を持ち崩す人もいたかもしれない。しかし、秩父事件の背景はもっと政治的・社

秩父事件を追って

会的・経済的な矛盾から発生した構造的なものであろう。

ちなみに、困民党三羽鳥の高岸善吉も坂本宗作も「博徒」ではなくむしろ「篤農家」であるといつてよい。

ただ、歴史的評価を定めるにはまだまだ探究しなければならない。秩父を巡った折り、事件に参加しなかった側の子孫の方から、「暴徒」観によるかなり辛らつな発言を聞いたこともあった。なかなか事件の全体像を明確につかむにはまだ時間がかかる。

長野佐久への転進はあったが、ほぼ秩父で事件は封じ込められた。事件の数日前の10月29日(1884年)に自由党が解党している。板垣への懐柔策、自由党内部の路線の対立、群馬事件や加波山事件への責任等によるものであろう。事件勃発時にすでに最大の後ろ楯を失っていた。『自由党史』における秩父事件の扱ひもほとんど無視ないし軽視したものだ。しかし、自由党が解党したからといって自由党の支持者が急に無くなるわけでもなかるう。その関係性の内実は探究する必要がある。要はもっと全国的な規模での圧制に対する闘いは可能だったのか否かということである。

人物研究に戻ると、人物研究として私が関心を抱くのは井上传蔵である。彼の足跡を追って昨夏、北海道を訪ねた。石狩と北見を中心に巡った。また、伝蔵の子孫の方とも近々お会いすることになっている。いずれ論文にまとめた。ここでは石狩尚古社資料館の中島勝久氏に御礼を申し上げておきたい。数時間にわたり懇切丁寧なご説明を頂戴した。また、北見では北見市年史編纂主幹の斉藤幸喜氏に伝蔵ゆかりの地をご案内いただいた。また、前北見市企画部主幹の田丸誠氏のご論考「野付牛における井上传蔵」もいただいた。この場を借りて御礼申し上げたい。

これからの私の研究は井上传蔵と事件の全体像探究となる。

秩父事件のアウトライン

これは岩崎琢也君が担当した。体育会野球部に属する彼はなかなか多忙でゼミメンバーの中で唯一、一度も秩父を訪ねていない。もっぱら文献調査・研究を専らとした。アウトラインを正鵠に描くのは難しい。報告書は秩父事件をあまり知らない人に簡単に事件を紹介した程度であった。こう書くと岩崎君には悪いかもしれない。しかし、難しいところの担当だったということである。

岩崎君でおもしろかったのは「農民が武装蜂起をし、警察や東京鎮台と打ち合いになって亡くなられた方がいるという点で、はたして民権運動の最高点だといえるかは疑問に思う部分ではある」という文言だ。ガンジーのような闘い方もあるということだろうか。

おわりに

今回は学生の記述に添いつつ、私の見解も加えるかたちで展開した。学生と一年間かけて探究できたことは喜びであった。2015年度も継続して探究したかったが、学生はそれぞれ自分なりの課題なり問題意識をもっているのも、それは叶わなかった。しかし、2015年度の様々な学校の研究も楽しいものだった。機会があれば、これも報告したい。14年度ゼミ生で秋学期からカナダに留学したのは大井真澄さんだ。これで全員の紹介をしたことになる。彼女は秩父には一度参加している。報告書は書いていない。15年度もこのゼミを受講し、朝鮮学校の調査・研究をした。

それはともかく、これからの研究の方向性も述べておいた。今回はまだ十分な論証はできていないので研究ノートとする。

秩父事件を追って

参考文献

1. 井上幸治『秩父事件』（中公新書，昭和43年）
2. 戸井昌造『秩父事件を歩く』全3巻（新人物往来社，昭和53年～57年）
3. 中澤市朗『歴史紀行 秩父事件』（新日本出版社，1991年）
4. 浅見好夫『秩父事件史』（言叢社，1990年）
5. 井出孫六編著『自由自治元年』（現代教養文庫，1987年）この本に参考文献一覧あり
6. 中澤市朗編『秩父困民党に生きた人びと』（現代史出版会・徳間書店，1977年）
7. 井出孫六『秩父困民党群像』（新人物往来社，1973年。教養文庫，1986年）
8. 松本健一『秩父コミュニケーション伝説——山影に消えた困民党』（河出書房新社，昭和61年）
9. 井上幸治『定本秩父事件』（藤原書店，1994年）
10. 大村進他編『田中千弥日記』（埼玉新聞社出版局，昭和52年）
11. 小池喜孝『秩父嵐——秩父事件と井上伝蔵——』（現代史出版会，1974年）
12. 秩父事件研究顕彰協議会編『ガイドブック秩父事件』（新日本出版社，1999年）
13. 同上編『秩父事件——圧制ヲ変ジテ自由ノ世界ヲ』（新日本出版社，2004年）
14. 中嶋幸三『井上伝蔵とその時代』（埼玉新聞社，2004年）
15. 井上幸治・色川大吉・山田昭次編集『秩父事件史料集成』全6巻（二玄社，1984年～89年）
16. 五十嵐睦子他『女たちの秩父事件』（新人物往来社，1984年）
17. 新井佐次郎『秩父事件の妻たち』（東書選書，1984年）
18. A・コルベジエ『秩父事件とパリ・コミュニケーション』（風響社，1995年）
19. 若狭藏之助『秩父事件 農民蜂起の背景と思想』（埼玉新聞社，2003年）
20. 板垣退助監修 遠山茂樹他校訂『自由党史』下（岩波文庫，1958年）人名のまちがいや数値にも疑問が残る 要検討
21. 春田国男『裁かれる日々——秩父事件と明治の裁判』（日本評論社，1985年）それによれば，横田周作，塩谷房吉が加わる。なお，新井守一は（宇市・卯市）か。